

書寫山縁起絵巻拝観のガイド

『播州書寫山縁起 絵・詞 各一卷』 江戸時代
絵 紙本着色 33.8 × 2,240.6 (24 紙)
詞 紙本墨書 33.8 × 985.6 (11 紙)

圓教寺の開創を中心にして、性空上人の誕生から入寂までの行状を描き、絵と詞それぞれ 1 巻の巻物に仕立てている。詞の巻のみに奥書があり、それによると、文章は書寫山の僧快倫の撰、絵は土佐廣通(住吉如慶)筆、詞は雙巖院豪倪筆である。しかし、絵を廣通の筆とする点については画風から見て疑問が残る。廣通周辺の画家を想定してもよかろう。圓教寺の縁起については、なお検討が必要であるが、『遺統集』等の記述から、当時すでに縁起といわれるものが成立していたことが確認できる。

<奥書>

右縁起両軸大和畫本處土佐内記廣通彩畫言書 天海大僧正親弟雙巖院豪倪佳筆也 某甲余記事作之去歲於江戸東叡山整之逮干臘還當山今月又依 幕下御上意赴東関歸寺存命叡期之間書加之願共驚頭分土靈岫永可被納寺庫者也

寛永廿一年 關逢浯灘仲夏十八日
書寫山理教房前住内供奉快倫 春秋六十九

上記は、昭和 61 年 3 月 30 日発行の
「兵庫県立歴史博物館、開館 3 周年記念特別展
-1000 年の歴史を秘める-書寫山圓教寺 展図録」より。

【お断り】

此の絵巻は、これまで各地の美術館、博物館において部分的に展示されたことはありますが、全編を公開は、上人様壺千年御遠忌(2006)以来となります。

14 丁目から巻末について、詞書きと絵の部分に相違があります。恐らく布教の都合上、近世に前後を組み替えてお話しを組み立てたことによるものと思われまふ。

少々見にくいかも知れませんが、詞書きの順序に従って、絵の繋がり様を考慮して組み替えてみました。それが絵巻本体の上段に並べたものです。絵巻に付けた番号札が順序だっていないのはその為です。

上人様の人寂で終わるのではなく、その後の圓教寺の繁栄の様子を描いています。『書寫山參詣絵図』同様に、此の絵巻が書かれた江戸期には存在しない五重塔や多宝塔なども描かれていて、両絵図が同じ用途をもって使われた可能性もあります。

1

一、子をうみ給てさつせう持運体 一、父の御屋かた
一、左の手をにされる開て見る体 一、うふ屋の体まくらあり
性空上人様は、橘諸兄から数えて 6 代目にあたられ、父は橘善根、母は源氏で、延喜十年にお生まれになりました。

上人様は、左の手に普賢菩薩の象徴とされる、針を握って生まれ給うたと伝えられています。上人様の母君は、今までにお産をするたびに難産で大変苦しんで来られ、その為毒薬を飲んで墮胎を謀られようとしてしました。しかし、効果は全く現れず、反対に今回のお産は、苦しみのない安産でした。その話が伝わり、母の使った枕を拝ませてもらうと多くの人々が安産を祈って参詣しました。書寫山は古くから、安産祈願のお寺としても知られています。

2

一、児をいたきてねふる体 一、垣のほとりに遊ぶ体
一、余のわらんへの遊ぶ体 一、上人不交独ある体
一、梅の宮の体 一、師に経ならぶ体

性空上人様は、幼い頃から決して生き物を殺さなかったそうです。また他の子供達とも一緒に遊ぶことなく一人でしずかに遊んでいる、そういう子供でした。

橘氏の氏神を祀っている神社を梅の宮で、10 歳の年に、社僧から妙法蓮華經全八巻を授けられ、その後読誦され続けました。当時の貴族は、一族の子弟教育の施設を持っていました。梅の宮神社に橘家の教學院があったと思えます。

3

一、げんふくの体
元服してからは橘善行(たちばなのよしゆき)と名乗られました。性空上人様の元服について詞書では「二十七の御年うみかうふり給へり」とあり、その年齢の高さに現代人でさえも違和感を感じます。上人様は橘家の氏神である梅ノ宮の社僧から法華經を習い、読み始めてから、出家の志を強く持つておられました。実は冒頭の引用部分は、「かくてしゅつけをねがはせ給へども父母許し給へで、二十七の御年・・・」と続くのです。出家を願う上人様と、それを許さない両親、一族の間での相克が出家の時期を遅らせた要因の一つかも知れません。

4

一、日向にて御出家の体 一、きりしま山にて粳米現し、まどのもにもちある体
一、背ふり山にて異僧の一まひの書を左の手にてとり給ふ体

初冠した翌年、承平 7 年(937)母を伴って赴任地である九州日向国に向かわれました。日向に赴いてから 9 年目の天慶 8 年(945)、化人が母を論し、勧めたことから、善行の出家得度が許されました。36 歳、僧「性空」の誕生です。化人とは仏が人の姿になって仮に現れたものです。

そのまま同国の霧島山に参籠して本格的に法華經読誦を始められました。不思議なことに食料が絶えそうになった頃、読誦する經本の中から米が出現したり、菴の窓辺に暖

かい餅が置かれていたりと言うことがあり、その味は甘露でそれ以降全く飢えることがなかったと言います。39歳の時には法華経8巻全てを誦誦されました。

山頂から玄界灘、遠くに中国大陸を望む脊振山は、古くからの霊山です。上人様も入唐の夢を抱いておられたのかも知れません。脊振では仏の化身が現れて、必ず上人が悟りを得られることを示しました。

5

一、児童とともに経を読む体 一、同所にて白幡の現したる体
この時童子が現れて上人様と共に誦誦したと伝えられています。上人様は39歳の時に法華経を全て誦誦されていたと言うことから、この童子も人間とは考えられません。また白幡が現れると言う奇瑞があり、白幡が不動明王の御験であることから、上人は不動明王を勧請されます。この時に乙天護法童子(本地不動明王)が現れ、以後上人に終始お伴しました。

ここ脊振山には、和銅2(709)年に湛普上人が開山したと伝えられる霊仙寺跡があり、山岳仏教の修験地として栄えました。上人様がいらっしゃった頃の全容は明かではありませんが、脊振山の頂上を上宮、中腹にある霊仙寺一帯を中宮、山の麓にある修学院を下宮と称します。中世には脊振千坊を形成し、その中核を為しましたが、戦乱により衰退します。乙天護法童子は此処で示現し、千坊を誇った霊山寺には、現在中宮には唯一乙護法堂だけが残っていて、下宮の修学院様は、『積翠寺』または『積翠教寺』とも呼ばれ、天台宗の寺院として法灯護持繁栄されています。

6

一、九州よりのほり給ふ体 一、雲の導体
九州で20年近く過ごされた上人様は、生涯の身を置く道場を求めて山陽道を上ってこられます。道場に相応しいところはいくつかあったようですが、決心するまでには至らなかったようです。ある時、気がつくと上人様一行の行く手に不思議な雲が現れます。一行に併せて雲は動きます。雲の動きに導かれるように、一行は東へと歩を進めます。ところが播磨に入る頃から、その雲が全く動かなくなりました。その雲がかかった山が素盞の山、つまり書寫山でした。

7

一、雲見川の体 一、此山に雲の留体
この段は、川面に映る紫雲をみておられる様子が描かれています。このまま東上するか、播磨に身を置か、更に東上するかを思案されているようです。雲を眺めたところを「雲見川」、その渡しを「思案橋」といいます。山上にも、雲がかかった辺りにお堂があって、「紫雲堂」と呼んでいました。その場所は、現在の東坂参道の13丁目のあたりですが、登山のルートは、西坂参道を上ってこられたようです。坂中の文殊堂のあたりで、文殊菩薩の化身に出会い、山の名前、山上の3箇所の霊地を示されます。

8

一、上人そさへ御のほりの体 一、二間の草堂柚木の体
案内を受けて登山しているのは、上人様と、後に第1世となる弟子の延照でしょうか。

九州から一行の伴をしてきた人たちは、そのまま山麓に住し、今の東坂元集落のもとをつくったと伝えられています。

上人様の入山以前から、二間の草堂があったと伝えられますが、上人様の座しておられる草庵に隣接している堂が一字あります。そこには六尺の千手観音、金色の薬師、不動尊などが祀られていたと縁起は伝えています。

上人様の草庵は、もともと柚人たちが立て置いたものを改築したものでしたが、描かれているように粗末なものでした。それでも雨露をしのぐ屋根もあり、簷を垂らした四面の壁も八方の風を防ぎました。その上素晴らしい山の霊気の中で、法華経誦誦に専念できる。これ以上の場所は他に考えられなかったでしょう。この時康保3年(966)書寫寺開創の記念すべき日の情景です。

9

一、如意輪堂造立以前、天人桜を礼する体
一、桜を中切りにして、本尊を造る体 一、本堂造立、又鳥轉る体
素盞の鳥命が降り立ち、一宿し給うた准胝峯(白山の地)から南下すると、岩盤がむき出しになった場所があり、そこには大きな桜がありました。上人様がそこに出向いたとき、天人が舞い降りてきて、桜の周りを礼拝して飛び寿ぐという不思議な光景に出会いました。上人様は天人が称えていた文言から、如意輪観音を感得され、弟子の安鎮行者と共に、生きた木のままの桜樹に如意輪観音を刻まれました。当然根が生えていますから、動かすことができません。その周りに柱を立て、屋根を付けたのが如意輪堂であります。天禄元年(970)のことで、これが現在の摩尼殿です。摩尼殿の名は、承安4年(1174)4月3日から7日間参籠された後白河法皇による勅号です。

如意輪堂造立後、化鳥が来て祝い囀ったと言ひ、それは和歌に残されています。「何もみな厭わぬ山の木草には阿耨菩提の花ぞ咲くべき」と、その鳴き声は聞こえたそうです。

10

一、白山にて六根浄を得給ふ体 一、金剛薩埵にあひ給ふ体
一、皇慶に対面の体
法華経を6万回誦誦すれば、六根を浄むと言われるとおり、上人様は69歳の時、第三霊地白山で誦誦していらしたときに、六根清浄を得られました。梅の宮の社僧から法華経を習われてから59年目のことで、その後も98歳でお亡くなりになるまで懈怠なく誦誦されました。

また永観2年3月15日の夜(75歳)、夢の中に金剛薩埵が現れ、直々に胎藏界金剛界両部の印明を授けられました。上人様の甥で比叡山の皇慶阿闍梨が西国下向の折りに書寫山に立ち寄られ、印明を交合したところ、一つを除いてすべて合っていたと言われます。

11

一、法華堂三昧僧の体 一、三合米を牛馬運体
一、花山の法皇御対面、経をあそはす体
六根清浄得悟、金剛薩埵からの直伝、上人様の真摯な修行生活に惹かれ、随う僧侶も少しずつ増えてきたようで、寛和元年(985)には播磨の国司藤原季孝が法華三昧堂を建立

300石を集め、山上の僧学者等の糧にあてました。又慶雲(きょううん)大法師と言
う人は顕密修学の大徳で、一山の学頭として活躍し、行学日夜盛んになり、西の比叡山
としての風格を整え始めました。

寛和2年(986)7月23日の夜半、花山天皇は退位、慌ただしく山科の元慶寺にて出家
されました。そのまま上人様を訪ねるべく、わずかの警護を伴って播磨に向かわれ、27
日夜半には坂本茂利寺に到着し、28日に山上で上人様と対面されました。法華経序品を
共に読誦され、上人様は経の文義について解釈をされました。そして翌29日法皇一行は
英賀から船に乗って京に戻られました。

この時上人様から、奈良時代の徳道上人の観音霊場の故事をお聞きになったことが、
法皇が那智山参籠の後、西国巡礼を始められたきっかけになったと言われ、花山法皇は
「西国巡礼中興の祖」と讃えられています。

これが花山法皇書寫山行幸の様子です。随行した人数は20名ほどと伝えますが、行幸
と言うにはあまりにも寂しいものでした。

12

一、講堂供養の体

一、三間四面の講堂

花山法皇の行幸の後、寛和2年(986)11月4日、上人様の奏請により、翌永延元年(987)
5月26日比叡山の静安阿闍梨が院宣を奉じ来山し、「圓教寺」の寺号をもって御願寺と
なりました。先の行幸に際し、播磨の国司藤原茂利が米百石を献上しましたが、法皇は
それを上人様に贈り、これを以て講堂を建立されました。講堂は三間四面、檜皮葺で10
月7日には盛大に初度供養が行われ、實因、蔽久、院藏、安海、珍恵、清範、静照など
の「山門の名匠」が招かれました。縁起によれば講師を實因、読誦は播磨国分寺の住僧
法盛が勤めました。供養の願文は花山法皇の側近で、法皇に従って出家した寂空(権左
中弁入道惟成)が筆を執りました。今も大講堂に安置される本尊釈迦三尊・四天王像は、
上人様の弟子感阿(かんな)上人の作で、この時に開眼供養されました。この他に五尺の
聖観音、三尺の千手観音、五尺の如意輪観音等も安置されていました。

13

一、三九月読経念の時、鳥のさへつる体

一、経所に経よむ体

毎年3、9月に7日の間法華経を不断に読誦していましたが、何時の頃からか行わな
くなくなっていました。するとある年、3月の花の頃に尾長鳥がひとつが飛んできて、「春
秋作法山内衆早速読誦一乗典」と鳴いたと言います。「その声聞々々々たり」とつたえま
す。それ以降大経所にて従来の通りに法華経不断読誦会が執り行われるようになりました。
以前にも生木如意輪観音像造立の時、化鳥が飛んできて「何もみな厭わぬ山の木草
には阿彌菩提の花ぞ咲くべき」と囀ったことがありました。毎月の御願講で唱える「性
空上人和讃」の中に、『薩埵は夢に直授し、文殊は現(うつつ)に記を与う』とあるように、
化鳥、尾長鳥も文殊の化身なのでしょう。

14

一、貴賤往来文使の体

一、高僧対面、此中に恵心寂照等これあるへし、上人の前に乙若二童子あり

一、和泉式部の石塔

六根清浄を悟られたこと、金剛薩埵からの直伝、花山法皇の行幸等、ますます上人様
の名声は高まり、「太上法皇禪定殿下左府丞相公子王尊結縁し給はさるはなし」と言われ
ました。無論一般の多くの人々も書写に詣で、また手紙などを通じて縁を結び、更には
「せめてその姿だけでも」と望む者が絶えませんでした。そのような光景を描いた箇所
で、上人様のそばには乙天・若天が控え、対する僧侶の中に恵心僧都、寂照等の姿を見
ることができます。

画面左端には「和泉式部の歌塚」が既に描かれていますが、実際は上人様の滅後に建立
されたものです。場所も「文殊院山の南の尾」と記されていますから、建立当初は、文
殊堂の南の尾根だとされています。

15

一、花山の法皇浜より雨に御幸同御供の体

長保4年(1002)3月5日、花山法皇の2度目の行幸がありました。船で飾磨津に御到
着。この時上人様は既に彌勒寺に隠居されており、一行80余名は彌勒寺を目指されるこ
とになります。

途中から暴風雨となり、その中を進む御一行の様子を描いたものです。大雨のため川
は増水して、彌勒寺への橋が流されてしまい、彌勒寺を目前にして、一行は足止め状態
になります。上人様の侍童(乙天・若天)が川端の木を切り倒して、横たえて橋としまし
たが、御輿だけは渡れず留め置かれました。彌勒寺御到着は夜半となったそうです。

このような難儀にもかかわらず、伴の人々も、上人様との結縁を思い、「しのつく雨も
法悦のなみたとなれり」と喜び合ったと、詞書は伝えます。夢前町寺の大歳神社北に、
「花山法皇御輿屋跡」と言われる室町時代の遺構があります。

16

一、上人のすかたをうつし給ふ体

一、通宝寺堂の体

花山法皇は、一日彌勒寺に御逗留されました。その時に上人様のお姿を描き、行状を
記したと伝えられます。今に残る絵像は全てこの時のものが元になっています。

絵像は、延源がスケッチしたものを、都に持ち帰り、絵所の長者巨勢広貴が彩色して
完成させました。更に具平親王(村上天皇の皇子)が讀える文章を創案し、参議右大弁藤
原行成卿(書家、小野道風・藤原左理と三蹟)がそれを浄書し、絵像に書き加えました。

上人様の姿をほぼ下書きし終えた時に地震が起こり、延源の持っていた筆から墨が落
ちました。不思議なことにその墨の落ちた所、上人様の右目上には未だ描ききってい
ないアザがあったのです。長保4(1002)年3月6日、この地方に地震があったという貴重
な記録でもあります。

17

一、法皇書写の山を御下りの体

一、本堂にて御経供養の体

長保4(1002)年3月7日、花山法皇御一行は彌勒寺に一日御逗留されたあと、圓教寺
に行幸されました。如意輪堂(摩尼殿)に参詣され、東坂参道を下られる御様子が描かれ
ています。この時書寫山の松の木を持ち帰り、禁裏、仙洞へお植えになりました。また
東今宿の昌樂寺にもお立ち寄りになり、小松をお手植えされたとあります。

8日の寅の刻、船で御出発。10日には院に帰幸されました。船でご出発されたのは、

「飾磨津」でしょうか。夢前川河口の飾磨の港は、圓教寺の経済活動にとっても重要な位置を占めていました。

18

一、若丸かなしみの体 一、増賀上人へかみを送り給ふ体

一、乙丸釜をいたゞきて若丸文をもち八徳山へ飛体

乙天は不動明王、若天は毘沙門天の化身と言われています。上人様のお傍に常に仕えていましたが、若天の様相が恐ろしいので、人々には怖がられていました。そのため上人から暇を出され、泣きながら許しを請う若天が描かれています。しかしこの話はどうも合点がいかにぬところ。なにか他の理由に依るものではないかと思われま。

六根清浄を悟られた上人様は、居ながらにして、様々なことが感じ取れたようです。長徳元(995)年の冬の冬のこと、多武峯の増賀上人が上質の紙を求めているのを知った時には、播磨の杉原紙を届け、また八徳山八葉寺の寂心上人が湯釜を欲せられ、秘かに心に思っておられたところ、書寫山から湯釜が送られました。

絵巻には、中程に増賀上人への杉原紙を乙若に託す場面。左端には、雲に載った若天が手紙を持ち、乙天が湯釜を抱えて、八葉寺に向かうところが描かれています。八葉寺の寂心上人からは、御札に水晶の数珠が贈られました。

19

一、三月九日門弟うれひの体

寛弘4年(1007)3月9日、上人様は門弟を彌勒寺に集め、明日「生身を捨」て、「入寂する」ことを伝えました。そして翌10日未の刻(午後2時頃)、西に向かって定印を結び、安祥として昇霞されました。

この時の様子は「瑞雲かたかたにして、山川悉く動く、大衆涙を押さえて」とあり、混乱と悲嘆の様子がうかがえます。「十一日に闇維し奉る」とあります。闇維とは茶毘に伏すことです。

20

一、十一日たひの体 一、上人の木像造る体

寛弘4年(1007)3月10日に遷化された上人様の葬儀は、14日に行われたとの記述もありますが、絵巻の詞書きには11日に茶毘にふされたとあります。

一山大衆は四十九日の間念仏を絶やさず、満中陰には寛弘3年正月に上人様が立願して書写された大般若経を、その頃横川の僧都と呼ばれ、兄弟子でもある恵心僧都源信を導師に迎えて供養したとあります。

既に書寫山の一切を任されていた第1世執行延照は、安鎮に命じて尊像を刻ませ、御真骨を入れて壺を像内に収め、その年のうちに完成した御廟堂に安置しました。安鎮行者とは、如意輪堂(現摩尼殿)の生木如意輪観音を上人様と共に刻んだ弟子です。

21

一、おくのあんの体

安鎮が刻んだ御尊像に、上人様の御真骨を入れた壺を像内に収め、その年のうちに完

成した御廟堂の御本尊・普賢菩薩として安置しました。山の守護神たる乙天・若天を祀る護法堂、それに向き合うように護法堂拜殿もみえます。御廟堂は方形、両護法堂は春日造、拜殿は本瓦葺きです。現在と違うところは、護法堂には鳥居はなく、唐破風の門がつき、塀で囲まれています。

22

一、後白河参籠の体

性空上人様の亡くなられた後も、その徳を慕い、面影を偲ぶように書寫山への参詣は途絶えることはありませんでした。滅後168年、承安4年(1147)4月3日には、安芸宮島の巖島神社参詣の帰途、後白河法皇の行幸がありました。法皇は今の壽量院に7日間参籠されました。この時、造立以来開けられたことのなかった生木如意輪観音参拝のため、開帳の勅命があり、18世行事辨賀大徳が御案内申し上げました。これより圓教寺の住職を長吏(ちょうり)と称し、如意輪堂を摩尼殿と号す旨のお定めが法皇より出されました。またお戻りになる折には、自筆の御札を摩尼殿正面に打ち付けられました。生木如意輪観音を直接拝されたのは、後白河法皇と一遍上人のお二人だけです。

一遍上人は、弘安10年(1287)春、摩尼殿に一晚参籠されました。「聖絵」には『諸国遊行の思いで、たゞ当山巡礼にあり』とその感動を述べています。

23

一、東坂の体

一、如意輪堂七間に造替の堂

性空上人様の亡くなられた後も、圓教寺は隆盛の一途で、鎌倉時代に入り伽藍の整備が進みました。貞永元年(1232)には俊源上人が勸進して、大講堂を七間重層に造り改め、引き続いて建長2年(1250)10月29日に正信上人(二尊院上人)を導師として五重塔を供養しました。寛元3年(1245)11月3日、後醍醐天皇の勅願をもって俊源上人が、食堂を二階十三間に造り替え、三寶院としました。

建治2年(1276)6月2日、山陽道の諸国に対して、諸堂復興のため太政官符が発せられました。上人の建立された諸堂が痛み始めたのがこのころで、山内の衆徒も増えてきたことから、手狭な堂宇の改修が進められました。

上人様の御在世に多くの伽藍が建立されましたが、鎌倉時代になると、主要な建物の殆どが巨大化していきます。つまり、現在の大きさになっていきます。想像してみてください。本多家廟所が造営される以前、三之堂東には五重塔がそびえ立っていたのです。

24

一、理教院の体

一、五重の塔一切経蔵

一、三つの堂軒をならぶ

一、おくのあんの体

一、文珠院の体

一、鐘つき堂法華堂等の体

山上の荘厳がほぼ整えられた様子が描かれています。平安期に創建された建物の殆どは巨大化し、現在の規模となっています。この絵巻の作成された江戸時代にはすでに失われていた五重塔なども描かれています。